社会福祉法人カリヨン子どもセンター

大丈夫。一緒に考えよう。
ひとりぼっちじゃないんだよ。あなたは大切な人。

News Carillon No.51

『新しい場所で、2023 年のはじまり』

良い年になりますように

新しい年のはじまり、東京は快晴が続いています。カリヨン子どもセンターの子どもシェルター、自立援助ホームでは、おかげさまで子ども、職員ともに健やかに新年を迎えることができました。

2023 年、子どもたちそれぞれに目標、課題にむけて、大きく深呼吸して、あせらず、一歩ずつ前進していってほしいと思います。

各所の子ども、若者たちのために、ご支援とご協力を賜り、深く御礼申し上げます。本年も、どうぞよろしくお願いいたします

さて、カリヨン子どもセンター事務局の移転についてご報告します。事務局は、法人設立から数度の移転を経験しています。文京区本郷、文京区関口台、江戸川区南小岩……その時々の、大家さんと近隣の皆様には、あたたかく見守っていただき、安全にすごさせていただいてきました。感謝です。

そして、2022 年 9 月より、北区赤羽西の「ろくえもんやしき」にお世話になることになりました。「ろくえもんやしき」は、築 200 年（江戸時代の最後の頃）の立派な古民家です。関東大震災を、太平洋戦争を越え、建物のあちらこちらに文化財級の価値を持ちながらも、あくまで個人の住宅として、代々の鈴木六右衛門さんとご家族の皆さんなどがお住いになるために使ってこられました。

▲快晴の空の下、「ろくえもんやしき」の大きな屋根

INDEX

- 新しい場所で、2023 年のはじまり … 1
- 子どもシェルター新規立ちあげ支援と第三者評価策定にむけて … 3
- 夕やけ荘便り Part.36「あー夏休み 2022」 … 4
- とびらの家通信 Part.40「『ライオンキング』観劇」 … 5
- 子どもの家ガールズとともに Part.42「いつか、華々しい意志へ」 … 6
- 子どもの家ボーイズから Part.27「「手伝って」と言えるまで」 … 7

現在の第 17 代鈴木さんが、当法人の理事 坪井節子の古くからのお知り合いでした。家督を引き継がれたときに、これから「ろくえもんやしき」は、子ども、若者、女性、地域などの福祉や交流のために役立ててほしい、まずはカリヨン子どもセンターで活用しませんか、というお申し出を頂戴したのでした。

願ってもいないご提案に驚きましたが、鈴木さんは新しい仲間を迎えるために、「ろくえもんやしき」に曰く“ブライダルエステ”（建物の修繕等）を施し、ここから新たに 100 年、すごしやすく利用されていくためのご配慮をいただきました。私どもも責任と使命感をもって、今まで以上に充実した活動を展開させていただこうと思いを強くしています。

2022 年 8 月 26 日、当法人の関係者、鈴木さん親子、ご一緒に「ろくえもんやしき」に入る一般社団法人日本児童相談業務評価機関(J-Oschis)、古民家生活へのご助言をいただく認定 NPO 法人日本民家再生協会の皆さんと、ささやかに移転前セレモニーを行いました。

▲移転前セレモニー。この瞬間だけマスクを外して記念撮影

「ろくえもんやしき」は、小高い丘の上にあり、広く緑豊かなお庭に、夏はさわやかな風が吹き抜けます。冬は鈴木さんが土間の式台に置いた火鉢に炭火を熾してくださり、心地よくすごさせていただいています。玄関では、子どもたちの健康を守る長崎・五島列島伝統の「ばらもん凧」が、出迎えてくれます。初夏に梅を、秋に柿を、お庭で収穫し、美味しくいただきました。

▲ばらもん凧（左）と、鈴木さんが準備してくださったもみの木（右）

▲2023 年 1 月、約 3 年ぶりに対面形式での全職員会議を開催

OG からリクエストを受けて、ホットプレートでもんじゃ焼きを作って、職員といただきました。通信カラオケを楽しむ子どももいました。クリスマスには 100 名分のプレゼントをラッピングして発送「ろくえもんやしき」の長い歴史のなかでも、もんじゃ焼きの香りが天井をくすぐったのも、ボカロ曲（コンピュータソフト“ボーカロイド”で作成された音楽）が響き渡ったのも、サンタクロースの工場になったのも初めてのことだったのではないでしょうか。

コロナ禍にあって、子どもたちと一度に大勢で交流するイベントは控えていますが、単身訪れる子ども、若者たちはみんな、驚きつつ、喜んで建物探訪をさせていただいています。「ろくえもんやしき」の静かなたたずまいにほっと息をつき、都心にいることを忘れて、疲れた心身を休めてくれたらと思います。

これから、この地で、子どもや若者、おとな同士も、どのような時間をつみ重ねていくことになるのか、とても楽しみです。♫

子どもシェルター全国ネットワーク会議

子どもシェルター新規立ちあげ支援と第三者評価策定にむけて

「子どもシェルター全国ネットワーク会議」は、全国の子どもシェルターで、ゆるやかに繋がり、連携し、支えあうことを目的としたネットワーク組織です。カリヨン子どもセンターに事務局が置かれ、現在 22 法人が加盟しています。全国で 2023 年 1 月現在、19 軒の子どもシェルターが運営されています。

オンライン全国大会

2022 年 9 月 17 日、神奈川・子どもセンターてんぽの主催にて、全国大会がオンラインで開催され、延べ 164 名の参加がありました。コロナ禍において、3 度目のオンライン開催です。定期総会と厚生労働省の行政説明ののち、運営・職員（子どもシェルター、自立援助ホーム）、子ども担当弁護士それぞれの分科会をもち、また、子どもセンターてんぽの子どもシェルターと自立援助ホームのオンラインツアーを拝見しました。

子どもシェルター立ち上げ支援事業

2021 年 11 月～2025 年 3 月の期間にて、休眠預金活用事業の助成プロジェクト「子どもシェルター立ち上げ支援事業」が実施され、全国で新たに 4 法人が子どもシェルター設立に向けて準備中です。（2023 年中にあと 1～2 法人追加される可能性あり）

資金を休眠預金活用事業から、プロジェクト進捗や法人マネジメントの伴走支援を公益財団法人パブリックリソース財団から、子どもシェルター運営に関する実際のノウハウや情報提供は子どもシェルター全国ネットワーク会議から、とバックアップ体制が敷かれています。各地域のニーズや社会資源などの実情に根差した活気ある子どもシェルターが立ちあげられ、団体を超えて柔軟につながりあって、子ども、若者を支える支援の輪が広がっていくことを願います。

第三者評価基準策定にむけて

公益財団法人キリン福祉財団助成を受け、「子どもシェルターの第三者評価基準策定とモデル実施事業」を実施しています。

利用者のサービス選択又は事業の透明性の確保のための情報提供と、事業者のサービスの質の向上に向けた取り組みの支援として児童福祉分野でも導入が進む「第三者評価」。児童自立生活援助事業のうち、自立援助ホーム型の事業所（全国に約 240 施設）には、自治体によっては数年前から第三者評価が実施されるようになっており、今後段階的に子どもシェルター型の事業所も対象となる見通しです。

評価実施機関には、子どもシェルターの実情についての深い理解と、評価の受け手と評価者の対等な対話による審査体制を期待し、子どもシェルター独自の第三者評価基準が策定されることが望ましいと考えます。しかし現時点で、子どもシェルターと自立援助ホームの違いを的確に理解している評価機関は皆無であり、子どもシェルターの実態を知らない外部団体には評価基準を作ることは不可能です。

カリヨン子どもセンターが旗振り役として、子どもシェルター全国ネットワーク会議に呼びかけ、各団体の理事、職員、弁護士らによるプロジェクトチームを結成。立教大学 湯澤直美教授、明星大学 川松 亮教授を外部研究者としてお招きし、まずは第三者評価基準の元となる「子どもシェルター運営指針」策定にむけて、月 1～2 回のオンライン会議を重ね、9 月の全国大会でも広く討論されました。運営指針つまりは「**子どもシェルターとは何か**」という根源的な問いです。子どもシェルターとは、困難を抱えた子どもを緊急一時保護する“場所”を指すのではなく、“そこで行われる支援の全体像”と定義していこうと、協議が続いています。♫

夕やけ荘便り Part.36

あー夏休み 2022

冬の寒さが深まり、陽は穏やかな日中も風や影は恐ろしく冷たい日々です。

私たち夕やけ荘は女子５名、職員４名、なんとか越冬しようとご寄付のご馳走を頂いたり、それぞれクリスマスや年始にデートへ出かけたりと、皆様のご支援や周りの支えでなんとか暖かく過ごしております。
冬の寒さの中では、あんなに鬱陶しいと思っていた夏の熱気が恋しくなるものです。

2022 年夏、突き抜けるような青い８月にホームとして何年振りかになる《旅行》を決行いたしました。
このご時世、行くに行けぬが、それは常。ならばいつ行く今しかない。一度頓挫させた計画を再度呼び起こし、子ども３名、職員２名、夏の鴨川へと鈍行を乗り継ぎ。汗をかきかき、素敵な宿と温泉と海に参ったのです。

部屋を見て女子５名、海の青さに思わず叫び声を上げました。今回は１泊２日、海と温泉をまったり楽しもうというゆるいコンセプト。はしゃぎながら部屋を散策し、お茶菓子がおいしいと、まったりお茶をすすって温泉へ。
温泉もオーシャンビュー！ 肌がすべすべだ！ 浴衣の帯が結べない！ マッサージチェアが気持ち良い！ 私には少し痛いかも……女の子というのは話尽きぬもの、見たもの感じたもの全てを形容し論じながら喜ぶ姿を見ますと、我々職員も来ることができて本当に良かったと思わずにはいられません。
こんな美味しいものなかなか食べられない！ すごい何を食べてもおいしい！ と口々に褒めたたえながらご馳走をたんまり食し、夜は近くの漁港を眺めに雪踏をつっかけて散歩へ。
職員持参のカードゲームやタロット占いで恋愛模様を見たり、おしゃべりも止まらず、彼氏や好きな音楽の話で盛り上がりました。

明くる日は、浜辺と鴨川シーワールドへ。
透明な海に足を浸し、大きなシャチのショーで水浸しになったりと夏を満喫したのでした。
帰宅後、旅館で頂いたあおさの味噌汁が忘れられず、皆の密かなブームにもなりました。

この時世と共に入職した私は、今回が初の大きな外出行事。上手く引率が出来るのか心配もありました、実際子どもとはしゃいでしまったりもしました。(反省しております)
しかし、ホームでは見られない子どもの様子を見られて、旅行が実現できて、本当に良かった！
子どもと共通の景色を体験できて、共有し、私自身職員として成長させてもらった夏でした。長い夜も飽きたし、また早く夏になればいいのに。

2023 年も職員一同、団結して入退居者の支援にあたります。皆様からの、温かいご支援と、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。♫

（職員 K）

とびらの家通信 Part.40

『ライオンキング』観劇

いつも皆さまにはたいへんお世話になりありがとうございます。皆さんのご支援により、子どもたちは多くを学び、安心して過ごすことができています。

2022 年 12 月に劇団四季『ライオンキング』観劇・食事会のご招待をいただき、子どもと職員とで参加させていただきました。子どもたちそれぞれに、意義深い時間をすごさせていただいたようです。今回は、出かけた 3 名の子どもたちの感想を披露し、子どもたちの様子をお伝えしたいと思います（原文ママ、です）。

今日はライオンキングにお招きいただきありがとうございました。劇団四季を自分は初めて観劇しました。自分が思った以上に派手で演出等が凝っていてとても感激しました。特に、虎やキリンなどの目立たないキャラクターさえも仕草が細かくて、また子役の 2 人とも演技や声量がすごくて、自分よりも年下とは思えないほどでした。背景の移り変わりなどが一瞬のうちに行われていて、劇団四季のすごさを味わいました。
観劇はあんまり馴染みがない出来事ですが、今回のお招きを頂いて経験して良かったなあ、と感じました。またお食事の時は、海外からの留学生と交流でき、その際英語の会話の練習をさせてもらい、海外の話を聞かせてもらったので貴重な時間となりました。様々な準備や、費用が掛かったと思いますが、お招きくださりありがとうございました。

普段、とびらの家で見ない顔がそこにありました。恥ずかしがり屋の彼らが目を輝かせ積極的に支援者の皆さんや、支援者さんのお繋がりで参加されていた留学生との会話を楽しんでいました。

大変すばらしい作品を見ることができてうれしいです。
今までに劇団四季のミュージカルは『ジョン万次郎』しか見たことがなく、CM などでよく見かけるライオンキングをいつか見てみたいと思っていました。ムファサとの理想の親子関係、ナラとの不変の友情、落ち込んだ時に励ましてくれるティモンとプンヴァとの関係等が、きれいに表現されていたと感じました。無謀で無邪気な子供時代から、悩んで大人になり、自分の中で過去の解釈を形成して自信を取り戻すまでの変化は、不変のテーマだと思います。特に私のような青年期の人間にとってはこの変化の真っ最中で、共感する部分が大きく、感情的に大きく揺さぶられました。劇団四季のような高名な劇団の劇を、間近の席で見ることができたのは貴重な文化的経験です。招待して頂き、ありがとうございました。
その後の食事会も大変楽しい時間でした。異なる年齢や文化圏の人と話す経験はなかなかなかったので、面白い話をたくさん聞かせていただきました。また何かの機会にお会い出来たらうれしいです。

本日はお招きいただきましてありがとうございました。ライオンキングの劇は大迫力で圧倒されました。いままでこのような文芸に触れてこなかった身としては、本日の体験は刺激的で、一層趣深いものに感じました。
しゃぶしゃぶも美味しゅうございました。
お肉がいっぱい食べられたのでよかったです。
本日は誠に楽しい一日になりました。
ありがとうございました!

成育歴に鑑みると、よくぞここまで生きてこれたよ、というような子どもたち。彼らが青年期に突入し、様々な体験や出会いを通じそれぞれに感性を育み大人になっていきます。自分自身が楽しい経験をしない限り、なかなか楽しい経験を共有することが難しいと思います。皆様からのいろいろな形のご寄付に、改めまして感謝申し上げます。♫　　（とびらの家　職員一同）

子どもの家ガールズとともに Part.42

いつか、華々しい意志へ

新年おめでとうございます。今年は戦争のない世の中になりますように。皆さまにも健康で幸多き一年になりますようにと心より願っております。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

子どもたちと初詣に行きました。おみくじをひき、お年玉でちょっと贅沢なアイスを買って帰宅。ドアを開けると、新任職員が爽やかに「明けまして（開けまして）おめでとうございます！」とお出迎えです。

現在入居中の３人の子どもたち、とにかくよく食べます！ 職員がのし餅を出すと、初めてみる大きなお餅に驚く子、「家はいつもこれだった」と微かにドヤ顔する子、「危なっかしいから私がやるよ」と手際よく切り分け手伝ってくれる子と、反応はまちまち。きなこ餅、あんこ餅とのり餅でどんどん消費して、嬉しい悲鳴です。

狭い畳の上にごろっと３人で転がってTV を観ています。かわいい男子 vs かっこいい男子、きのこの山 vs たけのこの里、ハンサム vs お金持ちなどなど、ガールズトークはいつもエンドレスで盛り上がります。そしていつの間にか幼児言葉での小芝居に発展していき、大きな笑い声が響きわたります。これぞガールズ名物、箸が転んでもおかしい年頃ですなとおばあちゃん（職員）は目を細めます。

―――茨木のり子の「落ちこぼれ」という詩に、次のようなフレーズがあります。

落ちこぼれ 和菓子の名につけたいようなやさしさ
落ちこぼれにこそ 魅力も風合いも薫るのに
落ちこぼれの実 いっぱい包容できるのが豊かな大地
落ちこぼれ 華々しい意志であれ

子どもたちがスタッフさんと一緒に作ったアイシングクッキー。可憐なドレスにうっとりです。

ある子どもが、“親の期待に添えなかった、親を激怒させてしまった、つらいことから逃げてしまうだめな私”と半ば自嘲気味に落ち込んでいました。しかし私は、彼女のことを決して〈できそこない〉の落ちこぼれとは思えません。詩の言葉を借りて言えば、子どもたち一人ひとり、魅力も風合いも薫っているのです。その薫りを楽しむのも職員の醍醐味です。

子どもたちが背負ってしまった逆境を、自分の魅力や風合いに転換できたと思える日はずっと先かもしれません。ガールズ生活はほんのわずかな時間ですが、職員との会話だけでなく、共に暮らす同年代の子ども同士が談笑するなかにも、はたと自分を振り返り、知らず知らずに変化していくことがあります。そんなちょっとした体験が一粒の種になり、芽を出して花を咲かせて、いつか華々しい意志をもった自分自身に出会えたら……、そんな思いにて今日も子どもたちを見守っています。♫

（職員 山口 千里）

初めまして、中島です。ご縁があり、ガールズの職員として、チームに加えていただき４カ月が過ぎました。自分としてはあっと言う間でしたが、自身の仕事を振り返ると、職員、ボランティアスタッフの皆さんに支えていただくばかりで、やっとこさっとこ過ごした時間です。

そんな中、不思議と「カリヨン」の音色を思い出すようになりました。私は以前、カリヨンのある大学の近くに住んでいました。それぞれ異なる音を持つ鐘が鳴り、生まれる音色には、調和があり、穏やかだったことを覚えています。

ガールズには、違った個性と役割を持ちながら、互いを認め合い、同じ目標に向かって進んで行こうとする空気があります。足りていない部分を当たり前のようにカバーしあい、導いていただいているような毎日だからなのではないかと思いました。いつか、自分もカリヨンの鐘のひとつになれるように、目の前にある出来事にただただ丁寧に取り組み、せっかく結んでいただいたご縁を大切にしながら、更に、その先へ送っていけたらと思っています。そして、それがここにやって来る子どもたちにとっても、きっとプラスに繋がるのではないかと信じています。どうぞよろしくお願いいたします。

（職員 中島 朱美）

子どもの家ボーイズから Part.27

「手伝って」と言えるまで

５歳くらいの男の子が走ってきたかと思うと、おもむろに街路樹にしがみついた。男の子を追って両親らしき男女がやってきた。すべすべとした幹に一生懸命、足を引っかけようとしている男の子。立ち尽くす両親。

男の子は２度、３度と幹から足を滑らせると、両親に向かって叫んだ。

「もう！登るの手伝って！」

「えぇ～」と困惑する父親。

「登らないんだよ」とたしなめる母親。

私が通りすがる、十数秒の間のできごと。そんな光景をみながら、ふと思う。

「おぉ…あの子、言えるんだな。『手伝って』って」。職業病である。ご両親は苦慮なさっているのに…

「手伝って」と言えるようになるには、①誰かが「手伝って」と言っている姿を見て学ぶか教えられる必要があり、②自身が発信する「手伝って」というアクションを誰かに受けとめられて手伝ってもらえた体験がなければならず、③手伝ってもらえて「助かった」「誰かの力を借りれば、何とかなる」と思えなければならない。

人間というのはつくづく、社会的な生き物だなぁと思う。他者に「手伝って」という力のあるなしで、選択肢や可能性の広がりが大きく違ってくる。街路樹を登る可能性はおいておくとしても。

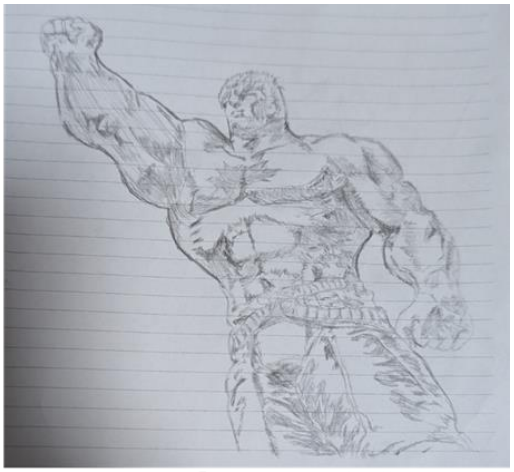
「手伝って」という習慣がないまま大きくなった人が、「手伝って」と言えるようになるのは、本当に難しいことなのだと思う。言えない原因は様々で、保護者が「手伝って」と言えない人だったのかもしれないし、保護者に気を遣って「手伝って」なんて言い出せなかったのかもしれない。その子が「手伝って」ということを保護者が甘えとして厳しく制していた場合もあるだろう。「手伝って」と言っても反応がなければ、「手伝って」なんて言わなくなる。「言ってもムダ」という学習性無力感を身に付ける。

ボーイズに入居するほどの事情を抱えている場合、退居した後の暮らしを「手伝って」なしに生きていくのは、かなりハードになると思う。

なので、入居者が「手伝って」というのが二ガテな様子であったら、ボーイズの入居中に「手伝って」と言えるようなケアもしたい。しかし、子どもシェルターの難しいところは、①一応、自立を目指す施設であるということ、②ボーイズに入居する子たちは多感なティーンエイジャーだということ。

①から、ある程度、自分のことは自分でできるようになろうという働きかけは必要で、②から、アイデンティティの形成過程である入居者自身が「できない」自分自身を認めることには大きな葛藤を伴うかもしれない。「自分で頑張りたい」という気持ちも大切にしたい……。

そうなると、やはり、大きくなってから「手伝って」が使えるようになるには、その子が思うままに挑戦してみて、失敗を重ねて、自分にできることとできないことや、得手不得手などを見極める経験を、誰かと共にやるというプロセスが必要なのだろう。これは、社会の中で試すことが必要な、そして長い時間のかかる営みなのだと思う。↗



▲入居者が描いた「**我が生涯に一片の悔いなし！！**」の名言を残す、『北斗の拳』のラオウ。自身の記憶のみで描いてこのクオリティである。悔いのない人生を生きて欲しい。

↘　植松努さんというロケット開発をしている工場長の方が、「教育とは、死に至らない程度の失敗を安全に経験させるためのもの」という話をしていた。

　悲しいかな、ボーイズの入居者には、「死のうと思った」と語る者も少なくない。きっと、「手伝って」とも言えず、しかし失敗も許されず、家庭でも、学校でも「教育」を受けられずに「死に至ろう」としていたのかもしれない。そんな状況で、社会の一部であるボーイズに来てくれたことは、不幸中の幸いであると信じたい。そして、ボーイズを出ていくときには、可能な限り「失敗しても大丈夫」な体制を構築して、送り出したいものである。

　気が付けば私の勤務も 10 年目に突入。私が勤め始めた頃に出会ったティーンの入居者たちは……アラサー？　もう 5 歳くらいの子どもに「手伝って」って叫ばれていてもおかしくない……ってコト！？　大人になった彼・彼女らには「手伝って」と言える人、受けとめてもらえる場所はあるだろうか？　たくさん増えていくといいな！

　10 年目を迎えても、まだまだ力不足を感じる日々。こんな私でも職員でいられるのは、同僚の温かい支えと、カリヨンを応援していただいているみなさんの励ましがあってこそだと、改めて痛感する 2023 年。今年もよろしくお願いいたします！♫

（職員　成澤　弘明）

▲ハロウィーントリオのお披露目です。（写真：ガールズ）

▲子どもたちが楽しく作ったお菓子の家が可愛すぎて……。
クリスマス前に勇気をもっていただきました。（写真：ガールズ）

編集後記

　寒中お見舞い申し上げます。今年もどうぞよろしくお願い申し上げます。巻頭言にもあります通り、カリヨン子どもセンターは創設から今年で 19 年目を迎えて素晴らしい事務局に移転いたしました。

　コロナ禍で長くできなかった対面での理事会、全職員会議も新事務局で行うことができ、理事・監事・ホーム長・職員などが久々に一堂に会することができました。「ろくえもんやしき」の関係者の皆さまには改めて心より感謝申し上げます。

　また、子どもシェルター全国ネットワーク会議におきましては 3 年にわたって対面での会合が出来ない中でオンライン会議を活用して新規事業立ちあげ支援、第三者評価基準策定案の検討等大きな成果をあげています。ソーシャルワークの基本は個人支援（ミクロ）から集団支援（メゾ）そして国や社会に対するアクション（マクロ）だと言われています。子どもシェルター事業はミクロから今まさにマクロへと発展しています。各ホームからの報告にあります通り、子どもたちはシェルターや自立援助ホームでの生活の中で、生まれて初めての経験をたくさん積むことが出来ています。また「手伝って」と言っていいんだという気持ちが芽生えて「手伝って」もらえて「助かった」「誰かの力を借りれば何とかなる」ことを学んでいるとのシェルターからの報告は「アフターケア事業」の基本ともなるものです。カリヨン子どもセンターでは現在そのための退所者の調査をしておりますが、これにはまたみなさまのお力が必要になるかと存じます。支援者の皆さまにはこれからも変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。寒さ厳しき折からくれぐれもご自愛のほどお祈り申し上げます。（T.Y）

News Carillon No.51

本誌は、社会福祉法人カリヨン子どもセンター事務局が責任を持って編集、発行しています。
本紙に関するご意見、ご要望、掲載を希望する情報などがありましたら、下記までご連絡ください。

社会福祉法人カリヨン子どもセンター事務局

東京都北区赤羽西 3-33-3

TEL 03-6458-9120　FAX 03-6458-9121

2023年1月23日発行（無断転載はご遠慮ください）